
ゆうさんと、

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆうさんと、

【Nコード】

N9943T

【作者名】

てんのすけ

【あらすじ】

大人のお姉さんと触れあう様子を書きました。

(前書き)

短いですが、よろしくお願いします。

「今日も冷えてるなあ」

比較的厚着をして外に出てきたつもりだったが、3月の深夜は寒い。

地域差というのものもあるのだろうけど、やっぱり寒い。

携帯で時間を確認すると、深夜の2時。

ベンチの背もたれに深く寄りかかるように座りなおして夜空に目を向ける。

深夜の冬とも春とも言えない空には幾億の星が輝いている。

そして、一際目立つ青白い輝きを見せる月。

今日は満月なんだ、とぼんやり夜空を見上げながら僕は今日も彼女を待ち続ける。

ここに来る前に買ったホットの缶コーヒーが完全に冷え切ったころに、彼女はやってきた。

「ゴメン！ 待った？」

「いいや？ 今来たところ」

馬鹿正直に2時間も待ちました、なんて言わない。

彼女の働くお店の閉店時間は深夜の1時半。クローズ作業なんかもあっただろうに、それでもこの時間に来てくれたのはとても嬉しい。

まあでも、彼女は俺がずっと前から待っていた、なんてことはお見通しだろう。

「いつもお仕事ご苦労様。コレ、冷えてるけど、どうぞ？」

「ありがとう」

僕が差し出した冷めた缶コーヒーを彼女は受け取ると、苦笑気味に軽くため息をついた。

「今来たなら缶コーヒーってもっと温かいんじゃない？」

そう言うと思ったので、予め用意していた答えを口に出すことに

した。

「コールドを買ったんだ」

「こんな冷えてる日に？」

「だって、ゆうさんお酒飲んでるでしょ？ そうだと気温は寒くても体の中は暑いんだろ？ ないって思ったから」

「そう」

また困ったように苦笑の表情になるゆうさん。

きつと、ゆうさんは俺に缶コーヒーの話から、ここで待ってなくていい、ということ告げたかったんだろうけど、絶対に譲らない。だって、ゆうさんと過ごすこの時間はとても貴重なものだから。

「ゆうさんとさ、こうやってまったりした時間を過ごすことって凄く貴重なものだと思ってる。この時間ばかりは誰にも譲りたくない、俺だけの時間だって思いたいんだ。ゆうさんは普段、お客さんに時間を売って癒しを提供してるでしょ？ だからさ、ゆうさんと一緒にいる時間ってとても少ないんだ。生活時間とかもずれてるしね。だからその分、どんな些細な時間でもゆうさんとの時間っていうのは大事にしたいだ」

冷めたコーヒーを飲みながらゆうさんは僕をじっと見て、困ったように微笑んだ。

「キミにはなんか、苦勞をかけちゃうね。こんな仕事をやってるかお互いにフリーな時間もずれちゃってるし。でも、辞めるわけにはいかないからさ」

「構わないよ。僕は、好きだから。お仕事してるゆうさんも、今のプライベートルなゆうさんも」

ゆうさんは、静かにコーヒーをベンチの隅に置くと、僕の首に腕を正面から回してきた。

ゆうさんに優しく俺は抱きしめられた。

「キミってさ」

首元でゆうさんの囁くような声。

首元で囁くように話されると、吐息が掠めるように当たってなん

だかくすぐつたい。

「はい？」

「ホントに年下なのかな？　なんか、こう、つい甘えなくなっちゃうんだよね」

「年下ですよ。ほら、つい最近まで受験戦争をしてたピカピカの一年生です」

おどけて入学する大学から届いたばかりの学生証をゆうさんに見せる僕。

すると、ゆうさんはクスツと笑った。

「写真のキミはなんだか幼いね」

「写真の僕を可愛がる前に、目の前にいる僕を構ってください」

「嫌だよ。だって、キミを構うよりもキミに構われないもん」

「いい大人がもん、とか」

「可愛いでしょう？　ドキドキしちゃう？」

「……否定はしませんよ」

「ふふ。ようやく、年相応の顔になったね」

「ゆうさんのばーか」

「ふふふ」

今日も二人で過ごす月夜。まだまだ寒いけど、なんだかあったかい、そんな僕たち。

(後書き)

感想、ご指摘を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9943t/>

ゆうさんと、

2011年10月8日10時40分発行